

平成 23 年度病害虫発生予察注意報 (第 1 号)

和歌山県農作物病害虫防除所

TEL 0736-64-2300

1. 病害虫名：イネ縞葉枯病
2. 対象作物：水稻
3. 発生地域：紀北地域
4. 発生予想量：多
5. 注意報発令の根拠
  - (1) 和歌山市 3 地点およびかつらぎ町 1 地点におけるヒメトビウンカ（越冬世代）のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は、いずれも 10 %以上と前年に引き続き高かった（表 1）。これらの保毒虫率は、平成 3～12 年の平均（2.8～3.4 %、表 2）より高い。
  - (2) 平成 22 年 7 月中旬における紀北地域本田のイネ縞葉枯病発生面積は 559ha であった。これは、前年の同時期における発生面積（564ha）とほぼ同じである。
  - (3) 平成 22 年 11 月 1 半旬に紀北地域においてひこばえでのイネ縞葉枯病発生状況を調査したところ、225 ほ場中 178 ほ場（調査ほ場の 79.1 %）で発生が確認された。また、その内 54 ほ場（調査ほ場の 24.0 %）は、ほ場内における発生面積の割合が 21 %以上であった。
  - (4) 休閑田におけるヒメトビウンカの生息数は、4 月中旬の和歌山市で 13.0 頭（平成 7.9 頭）、紀の川市で 12.3 頭（平成 8.3 頭）とやや多かった（表 3）。

表 1. ヒメトビウンカ(越冬世代)のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率<sup>a)</sup>

調査地点	平成23年 <sup>b)</sup>		平成22年 <sup>c)</sup>	
	検定虫数 (頭)	保毒虫率 (%)	検定虫数 (頭)	保毒虫率 (%)
和歌山市 小倉	197	12.2	78	10.3
和歌山市 川永	110	12.7	51	15.7
和歌山市 平尾・明王寺	120	19.2	105	20.0
かつらぎ町 窪	110	12.7	115	19.1

a)検定方法：高比重ラテックス凝集反応法

b)調査日：平成23年4月6～13日

c)調査日：平成22年4月5～8日

表 2. ヒメトビウンカ(越冬世代)のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率の推移(平成3～12年)

(単位：%)

調査地点	平成 12年	平成 11年	平成 10年	平成 9年	平成 8年	平成 7年	平成 6年	平成 5年	平成 4年	平成 3年	平均
和歌山市小倉	0.6	2.0	2.3	4.7	0.0	3.0	—	7.2	—	—	2.8
かつらぎ町窪	—	2.4	2.0	2.3	—	6.6	3.4	2.0	3.0	5.1	3.4

注)ヒメトビウンカ採集および検定実施日は3月下旬～4月上旬。検定虫数が80頭以下の調査結果は除く。

検定方法：ラテックス凝集反応法

表3. 休閒田におけるヒメトビウンカの生息数(単位:頭)

調査時期		平成23年	平年
3月中下旬	和歌山市	51.5	2.7
	紀の川市	34.6	6.2
	かつらぎ町	5.8	1.4
4月上旬	和歌山市	11.0	7.9
	紀の川市	4.8	8.3
	かつらぎ町	6.7	5.9
4月中旬	和歌山市	13.0	7.9
	紀の川市	12.3	8.3
	かつらぎ町	6.3	5.9

注)すくい取り調査(捕虫網20回振り)

## 6. 防除対策

- (1) イネ苗へのヒメトビウンカの飛来を防ぐため、雑草地付近での育苗を避ける。
- (2) 窒素過多はイネ縞葉枯病の発生を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (3) 田植え時はヒメトビウンカに効果がある箱施薬剤を処理する。
- (4) 第1世代成虫は6月下旬頃に水田へ飛来し、第2世代幼虫の発生最盛期は7月上旬と考えられることから、前年にイネ縞葉枯病の発生が認められた地域では、この時期の幼虫を対象に追加防除を行う。
- (5) 本県の水稲奨励品種のうち、ハナエチゼン、イクヒカリ、キヌヒカリ、きぬむすめはイネ縞葉枯病に罹病しやすいので、特に注意する。
- (6) イネ縞葉枯病を媒介するヒメトビウンカは、休閒田やほ場周辺のイネ科雑草で越冬するので、冬期水田の耕起を励行する。
- (7) 農薬については、最新の登録情報 ([http://www.acis.famic.go.jp/index\\_kensaku.htm](http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm) 農林水産消費安全技術センター HP 農薬登録情報検索システム) を参照し、適正に使用する。